9 露出した岩肌

露出している箇所に出くわす（図9）。かつての島の端っこなのだろうか、異様な感じがした。

室町時代から江戸時代前期にかけての干拓事業により新田が開発され、新たに作られた土地には塩分に強いイ草や綿花が栽培された。江戸時代、倉敷は徳川幕府の天領となり代官所が設けられ、物資集積地として栄えた。

明治時代になると、国内最初の民間紡績所である下村紡績、玉島紡績が児島、玉島にそれぞれ開業し（1881年（明治14年））、さらには代官所跡に倉敷紡績所（現・アイビースクエア）が創設され、紡績産業の発展は、倉敷の発展へとつながった。足袋、学生服、ジーンズなどが有名である。

景観保全

重要伝統的建造物群保存地区は、城下町、宿場町、門前町、商家町、山村集落など、歴史的な集落・町並みを保存すべく、市町村が定める伝統的建造物群保存地区のうち、価値の高いものを国が選定するものである。現在は、43都道府県120地区が指定されている。

第1号は、1976年（昭和51年）に選定された、仙北市角館（秋田県）、南木曽町妻籠宿（長野県）、白川村荻町（岐阜県）、京都市産寧坂、京都市祇園新橋（以上、京都府）、萩市堀内地区、萩市平安古地区（以上、山口県）の7地区である。

倉敷川畔と聞けば、倉敷川沿いに建つ白壁の土蔵群と柳並木、そして、雁木を思い浮かべる（図10）。この地区は、1979年（昭和54年）、重要伝統的建造物群保存地区に指定された。全国で13番目である。

倉敷は、これより前から風情ある町なかの風景を守るべく、1968年（昭和43年）に「倉敷市伝統美観保存条例」を制定した。金沢に次いで全国2番目の早さである。高度経済成長のさなか、都市では異例の、景観保全に対する町人の意識、実行力がなければ今ごろはどうなっていただろうか。

11 大原美術館本館　12 大原美術館より大原邸　13 大原美術館別館

10 倉敷川畔

14 倉敷考古館

15 有隣荘

16 倉敷市庁舎

17 市民ホール

18 日替わり定食

集積度の高さ

美観地区を歩くと、時代を跨いだ素敵な建物群、その集積の高さに驚く。点から点ではなく、一軒見学して、次はお隣を見学してみよう、という具合だ。宝箱の中をそぞろ歩ける嬉しさ。

大原美術館は、大原孫三郎が1930年（昭和5年）に開館した私立博物館（図11、12）。東京府美術館（現・東京都美術館）の開館が1926年（大正13年）、京都市美術館が1933年（昭和8年）、大阪市美術館が1936年（昭和11年）だから、如何に早い時期なのかが窺える。この分館が1961年（昭和36年）に浦辺の設計により完成しているが、建物は低く、城壁のようである（図13）。当時の急激な都市化から美観地区を守る城壁として構想されたためらしい。

倉敷考古館は、古代吉備の歴史を紹介する。本館は江戸時代の米蔵を改装した木造であり、なまこ壁が特徴的。1957年に新設された増築棟は浦辺による。本館を意識しつつ、新たな建築を模索した姿である（図14）。

大原美術館の向かいに、緑がかった瓦屋根と橙色の壁とした有隣荘（大原家別邸）。設計は薬師寺主計。古い写真を眺めているような、モノトーンの建物が並ぶ美観地区の中で、色を感じる（図15）。

街角

現在の市役所も浦辺さんの仕事（1980年、図16）。一階の市民ホールは、正に市民に開かれた空間。大理石でできたモザイクタイルの床は倉敷の幸を表現されている（図17）。

街角の喫茶「かど」で食事。日替り定食に天ぷらが付いてくるのは嬉しい（図18）。さらには、チクワとシソがワンオブジェクト化されていて可愛らしい。「十人のうち七人も八人も賛成するようなら、もうやらない方がいい」大原孫三郎の言葉はありがたし。